

震災伝承施設に必要な要件の探索的分析—木籠メモリアルパークへの再訪者に対する質的調査をもとに—

山崎 麻里子¹・佐藤 翔輔²・山口 壽道³・マリ エリザベス²

Explorative Analysis of Critical Requirements of Disaster Memorial Facilities - Based on a Qualitative Survey of Repeat Visitors to the Kogomo Memorial Park -

Mariko YAMAZAKI¹, Shosuke SATO²,
Toshimichi YAMAGUCHI³ and MALY Elizabeth²

Abstract

In the 5 years that have passed since the opening of the Chuetsu Memorial Corridor, various tendencies can be observed of visitors and repeat visitors of the different facilities, which each have their own unique characteristics.

Based on a survey of the Kogomo Memorial Park as an example, the following points can be identified as important factors for the Memorial Corridor to be used by many visitors, as facility not just about the past but also to be a well-loved facility with long term meaning.

- 1) Within the exhibits and information introduced in the facilities, the inclusion of local information and experiences of local people who overcame the disaster
- 2) Instead of a one-way dissemination of information, interactive and two-way exchange.
- 3) If the feeling of knowing familiar faces there is created, exchanges will happen.

By adopting these necessary principles, the Chuetsu Memorial Corridor, which including the Kogomo Memorial Park has 4 facilities and 3 memorial parks, will be not only a disaster memorial facility, but also a place for various interactions used by many people.

キーワード：2004年新潟県中越地震災害（中越大震災）、災害伝承、災害遺構、参与観察、インタビュー調査

Key words : the 2004 Niigata Chuetsu Earthquake disaster, disaster tradition, disaster remain, participant observation, interview survey

¹ 公益社団法人中越防災安全推進機構
Chuetsu Organization for Safe and Secure Society

² 東北大学災害科学国際研究所
International Research Institute of Disaster Science,
Tohoku University

³ 公益財団法人山の暮らし再生機構
The Organization for Renaissance of Life in Motherland

1. はじめに

2004年新潟県中越地震災害(中越大震災)の被災地では、同災害のメモリアル事業の構想に関する議論が、震災の発生直後からなされ、その多くが具現化されている。「震災復興ビジョン策定懇話会」¹⁾が立ち上がり、震災復興に向けた議論が行われている。ここで策定された「新潟県中越大震災 震災復興ビジョン」においては、「震災メモリアルパーク」及び「震災アーカイブス・震災ミュージアム」の必要性が提言された。また、「新潟県中越大震災復興計画」²⁾においても「震災メモリアルパーク」及び「震災アーカイブス」の必要性が提言されている。

2007年には、長岡市、小千谷市、旧川口町(現長岡市)3市町で共同策定した「災害メモリアル拠点整備基本構想」を新潟県知事に提案し、整備の進捗が図られるよう要望、2008年には「震災メモリアル検討会準備会」の開催、「メモリアル拠点整備委員会」の発足と6地区の作業検討部会の設置により、各地域の意見を反映させる形で検討が始まった。2009年「メモリアル拠点整備委員会」が「災害メモリアル拠点整備基本構想」に関する提言を取りまとめ長岡市長、小千谷市長、川口町長へ提出。これをもとに長岡市長、小千谷市長、川口町長より「『災害メモリアル拠点整備』の進捗に関する要望書」が新潟県知事へ提出された。2010年より、6地区に設置された作業検討部会を展示運営委員会に移行し具体的な展示内容の検討に入っており、その後、2011年10月、「中越メモリアル回廊」(3施設3メモリアルパーク)がオープンした。

2013年10月「やまこし復興交流館 おらたる」のオープンにより、「中越メモリアル回廊」4施設3メモリアルパークのグランドオープンとしている。当時、住民の帰村が遅れた山古志地域については、住民、行政、整備者の話し合いが行われている最中であり、4施設の足並みをそろえたオープンよりも、住民の意見を双方の納得した形での整備を優先したことで、2年遅れのオープンとなった。2014年、新潟県中越大震災10周年を迎え関係者からの注目を集め、また市民が震災を振り

返る時間と場所を提供することで多くの利用者があった(図1)。

同時に、震災で大きな被害を受けた旧山古志村(現長岡市山古志地域)には震災後からこれまで、支援関係者、研究者、観光客、他災害の被災者など様々な分野から視察・見学者が訪れており、多少の増減はあるものの、観光入込客数は震災以降徐々に上昇傾向を辿っている(図2)。清野ら³⁾の調査によれば、山古志地域の直売所を利用したことのある3分の2がリピーターであるとしている。さらにそのリピーターの半数近くが直売所を利用したきっかけを「観光などの通りがかり」としており、さらには中越大震災に関連したトピックを挙げる利用者も多いとしている。しかし、一方で、震災伝承施設へ再訪する要因ははっきりしていない。つまりここで山古志の再訪者の目的を探ることは、震災伝承施設に求められる役割や必要なプログラム、さらには施設の持続性を考える

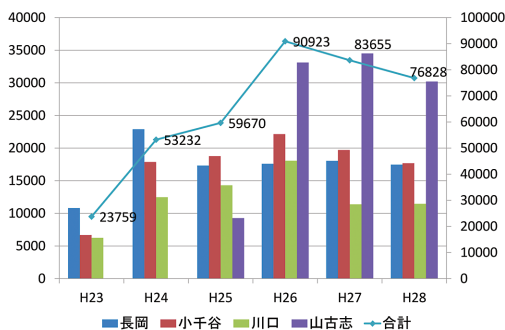


図1 中越メモリアル回廊の来館者数の推移

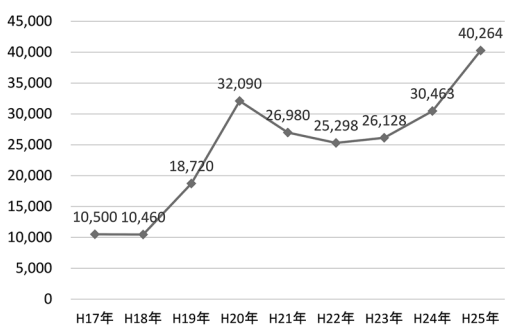


図2 山古志地域の観光入込客数

うえで重要であると考えられる。

震災伝承施設にとって何度も来訪してくれるリピーターは震災伝承、被災地支援、地域振興のために必要な顧客である。中越大震災復興ビジョン¹⁾では、「自然の恵みを生かした観光事業への特化・集中」の中で、被災地域にある自然景観、食、伝統、文化、宿泊などを有機的に結び付ける観光と滞在型、リピーター型観光の仕組みづくりの必要性を提唱している。

中越メモリアル回廊に関連する施設では、継続的な利用者を確保している。一方で、他の被災地における伝承施設では、異なる傾向が見られる。例えば、雲仙普賢岳噴火災害を伝承し、火山学習や火山観光の中核拠点として整備された「雲仙岳災害記念館」は、2002年7月に開館し、開館当初年度は想定を上回る35万人が利用したものの⁴⁾、その後減少推移をたどり、2013年度には11万5千人となっている⁵⁾。東日本大震災の被災地では、各市町村で様々な語り部、ガイド、展示の活動が展開されているが⁶⁾、宮城県内全体として、震災発生の翌年から翌々年(2012~2013年)をピークに利用者数が徐々に減少している⁷⁾。災害伝承施設の利用者を減少させず、持続可能な運営を実現するためには、リピーターの確保は急務であり、再訪の要因を明らかにすることは、既にある施設や今後設置される施設のあり方を検討する上で極めて重要である。

災害伝承施設に関する既往研究としては、其田ら⁴⁾の火山災害学習施設の観光客の動態に関する調査報告や、筑波⁸⁾による新潟県中越地震における震災遺構についての報告などがある。其田らは雲仙普賢岳の火山災害の被災地である島原地域を対象として火山災害学習施設の満足度、施設利用時間、施設滞在時間を明らかにしており、筑波は木籠メモリアルパークを対象として水没家屋が存置、活用されるまでの背景を明らかにしている。これらは災害伝承施設に関する研究ではあるものの、リピーターに関する議論はされていない。

一般的な観光地におけるリピーターに関する既往研究としては、岡村ら⁹⁾が当初の有名スポットの観光から、宿泊施設、自然景観や文化的催し、

季節性の高いイベントへと関心を写していくことを分析している。これらを組み合わせた観光プランを提示することがリピーター育成において重要であること、観光地を永続的に発展させるための方策は、ハード面から見た観光要素を備え、見せ方を工夫すること、ソフト面から見た魅力も組み込んでいく必要があることを明らかにしている。安達ら¹⁰⁾は、「人的つながり」「空間的なつながり」「食事の重要性」「いくつかの満足よりも、1つの感動」「最初の印象の重要性」の5点をリピーターの形成要因として整理している。一方で、これらの研究では災害伝承施設とリピーターとの関係性について考察はされていない。

そこで本研究は災害伝承施設への再訪の意図、再訪に至る動機付けと、再訪者を獲得するメカニズムを探索的に明らかにすることを目的とし、木籠メモリアルパークを事例に質的な調査を実施した。本稿での議論は、オープンから5年が経過した中越メモリアル回廊の今後の運営、および東日本大震災の被災地における震災伝承施設や全国の自然災害に関する伝承施設整備の参考になることを狙いとしている。

2. 研究方法

研究方法は、1)各施設の参与観察と2)インタビュー調査、および3)インタビュー結果の構造化の3種類から構成される。以下、調査対象のほか、各アプローチの内容について述べる。

2.1 調査対象とその背景

本研究では、「中越メモリアル回廊」(4施設3メモリアルパーク)のうち、「木籠メモリアルパーク」を対象に調査を行う。2004年10月23日に発生した新潟県中越地震(M6.8)は最大震度7を観測し、新潟県中越地方に甚大な被害をもたらした。うち、旧山古志村では震度6強を観測し、木籠集落を含む東竹沢地区において大規模な土砂崩落が起り、集落を流れる河川(芋川)がせき止められ河道閉塞が発生した(写真1)。これにより、木籠集落の全24世帯中14世帯が水没、残りの10世帯も全半壊の被害を受けた(表1)。住む場所を

失った木籠の住民は、小規模住宅地区改良事業を活用し、水没した元の集落が見下ろせる場所へ移転することとなった。

2007年5月、木籠区長を中心に工事現場の払い下げを受けたコンテナを利用し「郷見庵」(写真2)で集落に関する震災資料展示を開始。2008年、コンテナは集落の中心に近い位置に移設され、中越防災安全推進機構などがその周辺をアスファルト舗装し駐車スペースの整備を行った。2010年10



写真1 可動閉塞により水没した木籠集落

表1 山古志地域および木籠集落の人口推移

	平成16年10月	平成28年4月
人口(山古志全体)	2,167人	1,060人
世帯数(山古志全体)	690世帯	435世帯
人口(木籠)	67人	19人
世帯数(木籠)	24世帯	11世帯

2007年5月「郷見庵」



2010年10月「郷見庵」



写真2 来訪者の交流拠点となっている「郷見庵」

月、中越大震災復興基金地域復興支援事業「地域復興デザイン先導事業支援」を受けて現在の木造2階建ての郷見庵が竣工した。2011年10月、この一帯を中越メモリアル回廊の拠点の一つとして木籠メモリアルパークがオープンしている。なお中越メモリアル回廊には、木籠メモリアルパークの他に「長岡震災アーカイブセンター」「おぢや震災ミュージアム」「川口さずな館」「やまこし復興交流館」の4つの拠点施設と「震災メモリアルパーク」「妙見メモリアルパーク」の2カ所のメモリアルパークが整備され、いずれも重要な震災伝承の拠点となっている。いずれもリピーター調査対象とするべき施設であり、現在計画中である。本研究は、まず第一弾として木籠メモリアルパークを調査対象として定めた。

2.2 参与観察

筆頭著者は、前職で山古志地域住民を対象としたNPO法人職員として木籠集落に通い、コミュニティバスの運行支援や震災復興・地域振興に関わる活動支援に携わった。木籠メモリアルパークが整備される以前から、集落住民と来訪者の交流の様子と意識や感情に及ぼす影響を総合的に観察した。

所属機関においては、中越地方を視察目的で来訪する個人・団体をガイドする機会がある。木籠メモリアルパークをはじめ山古志地域はガイドコースの一環に組み込まれることが多い。木籠メモリアルパークがオープンした2011年10月から2017年3月現在までに、述べ42回のガイドを木籠メモリアルパーク周辺で行っている。さらなるさと会のイベントへの参加、ふるさと会会員と平成26年8月豪雨災害の被災地である兵庫県丹波市との被災地間交流を支援する中で、住民及びふるさと会会員の意識・感情の動向も合わせて総合的に調査した。これをもとに木籠メモリアルパークでの活動の全容の把握を行っている。

2.3 インタビュー調査

インタビュー調査は、2016年4月9日～9月19日の間、住民および「山古志木籠ふるさと会」(以

下、ふるさと会)の計19名にパーソナルインタビューを実施した。2008年、木籠の住民、集落を離れた人、木籠のファン、外部支援者による「山古志木籠集落準区民の会」(以下、準区民の会)が発足した。この準区民の会によって、集落住民だけでは継続が難しかった年中行事や地域づくり事業、交流イベントなどを実施した。その後、2010年に準区民の会を発展的解消しふるさと会が発足。年22回程度の年中行事やイベントの開催、年4回の会報の発行、カレンダーの制作・販売などを行っている。会員は139名(2016年4月現在)で、会員登録は全国各地からなる(図3)。

今研究の調査対象者は、以上をもとに1)木籠集落住民(4名)、2)県内在住のふるさと会会員かつふるさと会の役員(6名)、3)県内在住のふるさと会会員(3名)、4)関東圏在住のふるさと会会員(6名)の4つの分類から、全19名を選定した。なお表2-3段目に記した女性(No.3)は木籠集落出身で嫁ぎ先の近隣市よりほぼ毎日木籠集落に通っているため、インタビュー内容を木籠集落住民のものとして扱う。

一人当たりの時間は、10分~2時間で、構造化インタビューの形式で、1)来訪のきっかけ、2)再訪の理由や目的、3)頻度、4)訪問にかかる移動時間、5)訪問時の感想の5点を問うた。なお、1)来訪のきっかけについての問いについて、木籠集落住民へはふるさと会の活動の参加のきっかけを問うた。

2.4 インタビュー結果の構造化

回答内容は、インタビュー調査の中で得られた

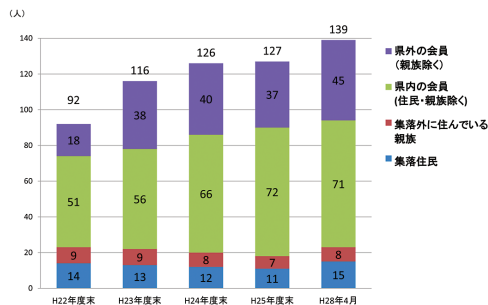


図3 山古志木籠ふるさと会の会員数の推移

発言を、1)来訪のきっかけ、2)今も来訪する理由・目的、3)頻度で整理し、木籠住民、県内在住・役員、県内在住・非役員、県外在住ごとに比較し、その考察を行う。

3. 結果

3.1 木籠集落住民へのインタビュー結果

震災以前より木籠集落では、過疎化・高齢化が進み、地域住民だけで集落行事を維持することが難しい状況となっていた。例えば道普請(みちぶしん)や塞ノ神(さいのかみ)、祭りや盆踊りなど、四季折々に行われてきた集落行事は、休止されるかまたは規模を縮小してかろうじて継続されていた。しかし、震災後多くの支援者や木籠好きが集まりふるさと会が発足され、外からの人材を受け入れ協力しながら地域行事を継続してきた木籠住民にとって、外部から人が来ること、また自分自身がその輪の中に加わることに違和感を感じていない。これは表2、上段一人目の70代女性(No.1)の「来たら嬉しい、来なくても気にしない」、60代男性(No.4)の「地域外の人に来て騒いでいても気にならない」という発言からも分かる。

同じく表2より、No.1の女性が今も活動に参加する理由として、震災で多くの支援を受け「よその人と出会い励ましてもらったから」その恩返しのため、二人目の女性(No.2)は「震災を伝承していきたいという主人の想いを引き継いだから」「地震がなければこんなこと(多くの人に来てくれるということ)など考えもしなかった」という、震災を体験した住民ならではの理由が挙げられた。また、「来てくれるお客さんを楽しませる前に、まずは自分たちが楽しむ場所」「よその人に来てもらって、来てよかったと満足して帰ってもらえたらそれでいい」など、自身の満足と来訪者へのホスピタリティの両面からの理由が挙げられた。

一方で、「顔見知りになった人が来てくれたらうれしいが、たまに来なくても気にしない」「住民だからと言って必ずイベントに参加しなければいけないという気負いはなく、理解してくれている」など、互いの立場や状況を理解し合い、集落行事やふるさと会のイベントに参加を強制するこ

表2 木籠集落住民へのインタビュー調査結果(木籠住民)

No.	対象者	活動参加のきっかけ	今も活動に参加する理由、目的	頻度
1	木籠集落在住 70代女性	木籠住民として会の活動に参加し続ける。畑でとれた野菜を運んでいる途中に、見学者に説明しながら配ったのが始まり。その後郷見庵でお茶飲みしたり、集落の説明をするようになった。	木籠に住んでいるから。都合がつけば、店番をしたり、予約があれば来客対応もいとわない。 よその人と出会い、励ましてもらったから。 生きがいがいい。 (来訪者が)来たなら嬉しい。来なくても気にしない。	時間があればいつでも
2	木籠集落在住 70代女性	木籠住民として、また会の代表で会ったご主人と共に活動に参加。 当初は店番程度だったが、ご主人がなくなっただけからは表に立つようになった。	前代表の「震災の記憶を残し伝えていきたい」「日本の故郷にしたい」「多くの人に来て、見て、知ってほしい」という想いを引き継いだ。 何気なく、ドライブで立ち寄りとなる場所、気軽にお茶を飲んでおしゃべりができる場所、憩いの場所を作りたい。一度来た人がまた違う人を連れてきたくなるような場所を作りたい。	お客さんが来た時に店が閉まっているのは苦痛。できるだけ見是版をしている。開けていないときも、連絡をもらえば郷見庵を開ける
3	小千谷市在住 木籠集落出身 30代女性 車で10~15分	木籠住民として、また会の代表で会った父と共に活動に参加。 当初は店番程度だったが、父がなくなっただけからは表に立つようになった。 母と共に補い合いながら活動。	村から出た人が、木籠にある畑作業や山菜取りの合間に休憩したり住民とおしゃべりする場所、することがなくても居心地のいい場所にしたい。 (訪問者が)来たいときにふらっと来られる場所にしたい。	ほぼ毎日
4	木籠集落在住 60代男性 現区長 現ふるさと会代表	木籠集落の住民は、みんな会員。前区長・代表の松井治二氏の死去に伴い、なり手がいないから自分になった。	別に、地域外の人に来て騒いでいても気にならない。 住民の中にも、催事に参加したくない人はいる。無理強いない。参加しなくても理解してくれている。	平日は仕事 イベント開催時のみ

とはなく、自由な往来が可能となっている。

3.2 県内在住のふるさと会会員かつ役員へのインタビュー結果

表3に、県内在住のふるさと会役員へのインタビュー結果を整理した結果を示す。

ふるさと会役員のうち数名は、震災3年後に山古志地域で行われた映画撮影のエキストラ出演をきっかけとしてこの地を訪れている。撮影終了後、地域の自然とそこに暮らす住民の魅力に惹かれ、有志で「マリの会」を立ち上げ、闘牛観戦や山菜取りなど山古志に通い続けた。その後、ふるさと会へと形を変え、震災から12年たった現在も年に20回程度、多い月には4~5回のペースで活動拠点となっている「郷見庵」に通っている。

それぞれに得意分野があり、木工を趣味とする会員はテーブルやベンチ、看板を作成し郷見庵に設置することで来訪者がくつろげるスペースを作り出している。接客を得意とする女性は大型観光

バスなどで訪問する観光客に対しお茶をふるまい、お土産を販売しながらもてなしている。車の運転が得意な男性は、自力で訪問できない友人を連れて来訪している。このようにそれぞれの趣味や得意分野を生かし楽しむことを来訪の目的としている。一方で、「市街地での生活では木工の趣味を生かしきれず居場所がない」、「休日家にいてもやることなく体がなまる」「退職後は時間を持って余している」という理由も上がっている。

齊藤¹⁾によれば高齢者は社会的役割の喪失や他社からの評価は得にくくなる状況の中で「相手の役に立つ」ことが生きがいにつながるとしている。表1の木籠住民インタビュー結果にある「人が来てくれたらうれしい」「一度来た人がまた違う人を連れてきたくなるような場所を作りたい」という回答から、住民たちはリピーターが他者を連れてくることを歓迎していることがわかる。また、表3の80代男性(No.5)の「来る人を楽しませる方法を考えている」、60代男性(No.6)の「自力で

表3 山古志木籠ふるさと会会員インタビュー調査結果(県内在住・役員)

No.	対象者	来訪のきっかけ	今も来館する理由、目的	頻度
5	長岡市街地在住 80代男性 車で30~40分	魚沼市(旧広神村)に行く際、山古志を經由していた。郷見庵ができたところから立ち寄り、趣味の木工の話をしたところ「郷見庵で売ればいい」という話となり、それ以来。	アイディアマンで、木籠でやりたいことがたくさん。自分も楽しみ、来る人も楽しませる方法を考える。 ぬか釜炊きコシヒカリおにぎり販売、水芭蕉の植樹、芋煮会などやりたいことがたくさん。趣味を生かした楽しみがある。 「日本のふるさと」にしたいという松井氏の言葉を受けて、自分も同じように案内している。実家のように気兼ねしない場所として、多くの人に来てほしい、くつろいでほしい。	週3~4回程度
6	長岡市寺泊地域在住 60代男性 車で50~60分	退職後、時間を持て余し、ドライブで立ち寄ってから。	友人や自力で来られない人など連れてきてあげたい。 時間はいくらでもある、暇つぶし。 山菜取りやぬか釜で炊いたご飯、おいしい清水など楽しみがいろいろあるから。	月3回程度
7	長岡市街地在住 50代女性 車で30~40分	震災3年後、テレビで見っていた山古志、被災地を自分の目で見ておこうと、ご主人と初めて訪問した際に松井さんと出会う。	年会費を払えば、準区民として堂々と通える。松井さん夫婦を父母のように慕う。松井さんの想いを知り、花を植え続けた。 趣味の手芸作品販売だけでなく、他人の商品も紹介するようになった。木籠集落を応援するつもりで通い、徐々に自分の癒し、楽しみとなり、継続している。 山古志に住む人を増やしたい。魅力を伝えたい。 「実家よりも気楽な実家」精神的な支えになってもらった。 得意分野をがんばればいい。	8~9日/月 仕事(介護職)の休みの日はほぼやまこしで過ごす。 「動かないと体がなまるから」
8	燕市在住 70代男性 ふるさと会事務局長	映画「マリと子犬の物語」でボランティアに参加。闘牛場の掃除などをする中で松井治二氏とであり、木籠に誘われ通い始めた。当時は「マリの会」として、有志が集まりやまこしを楽しむ会だった。	故松井治二氏との交流もあり、大切にしたい場所、ふるさと会。 事務局長という立場から、イベント開催時など、ほぼ毎回通っている。	(以前は)週3~4回 最近では月4~5回
9	新潟市在住 70代男性 ふるさと会役員	妻が「マリと子犬の物語」ボランティアに参加。マリの会立ち上げメンバーであり、誘われた。	自分たちが立ち上げた「マリの会」から発展した木籠ふるさと会が大切。	
10	三条市在住 60代女性 ふるさと会役員	映画「マリと子犬の物語」でボランティアに参加。闘牛場の掃除などをする中で松井治二氏とであり、木籠に誘われ通い始めた。当時は「マリの会」として、有志が集まりやまこしを楽しむ会だった。	以前よりも足を運ぶ回数は減った。昔は年に200日近く木籠に通っていた。旧知のメンバーと飲んで騒いで、おしゃべりするの楽しいから。 行っても気を使わない、行かなくても気をつかわない。	(以前は)週3~4回 最近では月4~5回

来られない人を連れてきてあげたい」の回答から、住民に歓迎されることがリピーターにとっての生きがい、やりがいになっていると考えられる。つまりここでわかったことは、木籠集落に通う理由は、斎藤¹¹⁾のいう「相手の役に立つこと」要は「木籠集落住民のために、新たな来訪者やリピーターを増やし住民に歓迎されること」を自らの役割、

生きがいとしているということである。

さらに今回ヒアリングした会員の多くは、集落を訪れた際、ふるさと会前代表であった松井治二氏(故人)と出合い、その人柄と「集落を残し震災を伝えていきたい」「多くの人に見てもらいたい、来てもらいたい」という想いに賛同して会員となっていることから、住民との出合い・交流、

特に松井氏との出会いは現在のレポート回数に大きく影響している。

3.3 県内在住のふるさと会会員へのインタビュー結果

表4に、県内在住のふるさと会会員へのインタビュー結果を整理した結果を示す。県内に在住する会員は年3～4回程度、ふるさと会の主催するイベントに参加する形でリピーターとなっている。いずれの会員も、最初のきっかけは「震災の被災地を自らの目で見てみたい」「震災に関する調査研究のため」など、中越大震災の被災地である木籠集落をめざしたものであった。しかしその後の訪問の目的は震災とは関係なく、集落での楽しみや人との出会い、木籠を他者へ紹介するためなど、震災とは関係のないものとなっている。

3.4 関東圏在住のふるさと会会員へのインタビュー結果

ふるさと会には全国からの会員登録がある(図4)。なかでも関東圏の会員は全体の約3割を占めている。関越自動車道を利用すれば車で4時間弱、上越新幹線を利用した場合は3時間程度で訪れることができ、物理的に訪問しやすい距離にあるため、特に東京都、埼玉県の会員数が多い。

表5に関東圏在住のふるさと会会員へのインタビュー結果を整理したものを示す。1組目の被験者(No.14)は、震災前から友人と共に錦鯉の見学のため山古志地域を訪れていた。そこで思い出の地であった山古志が、震災後どのような

のか自身の目で確かめたいと、車で訪問している(2012年5月)。この時、偶然通りがかった木籠集落で田植えイベントが行われており、飛び入り参加したところ、住民やほかの参加者と意気投合しふるさと会に入会している。

会員登録したきっかけとして、ここでもふるさと会前代表の松井氏の言葉「震災があったことを伝えていきたい」「全国の人に来てもらい、広めていきたい」という言葉に心を打たれ、その人柄に好意をもったからという点が挙げられた。

被験者の妻(No.15)は、「木籠住民の受け取りがいい」と発言している。これは「気持ちが温かい」「(対応が)気持ちがいい」ということであり、住民のみんなが温かく迎えてくれることをさしていると説明している。自分たちの訪問に対して「よく来たね(来てくれてありがとう)」「もう帰ってしまうのか(もう少しゆっくりしていけばいいの

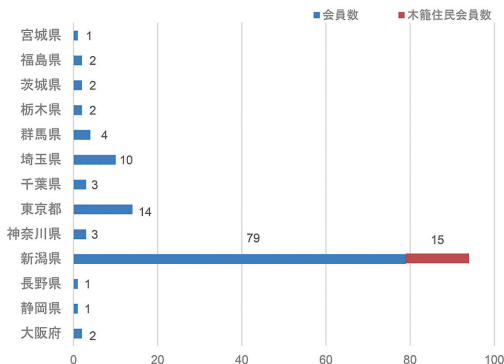


図4 山古志木籠ふるさと会の会員の県分布

表4 山古志木籠ふるさと会イベント参加者ヒアリング調査(県内在住)

No.	対象者	来訪のきっかけ	今も来館する理由、目的	頻度
11	長岡市小国町在住 70代男性 車で40～50分	隣の家の人が会員だったため、さそわれてイベントに参加した。小国町も自然が多く山のあるところだが、活動団体が無い。	小国町の自然も好きだから、早起きして山歩きをしているが、年中行事や来訪者との交流の場所として木籠に来る。何することは無いが、人づなぎ。	週3～4回 平日含む
12	新潟市在住 40代女性 車で90分	大学の研究で学生とともに現地調査に入り、松井さんと出会い会員に。	授業で学生を連れてくるのが難しくなったが、自分だけでもかわりを続けようと思い、参加している。	年3～4回 イベントに合わせて
13	新潟市在住 60代男性 車で90分	震災後から前区長の松井さんの生き方、人生観をテレビなどで見ていて共感していた。去年から会員に。	昨年の笹団子づくりに孫と参加。「今年も行きたい」という孫を連れて、娘夫婦も連れて家族で参加。	年1～2回 イベントに合わせて

表5 山古志木籠ふるさと会会員ヒアリング調査 (県外在住)

No.	対象者	来訪のきっかけ	今も来館する理由目的 / 補足	頻度
14	埼玉県在住 80代男性	震災前、友人と一緒に錦鯉を見学には山菜取りも。震災後、現地の様子を見に行ったところ、郷見庵で田植えをしていたところに参加。意気投合してそれから。	田植えをしたなら、次は稲刈り。と H24年秋に2度目の訪問。自作のフクロウの彫り物を参加会員の人数分(16体)持参して、仲良しに。被災地に対して、自らが作成した手彫りのフクロウを通して何かしらの支援がしたい。自分の作品があれば、そこから交流が生まれる。 手彫りのフクロウを送っている。その売り上げをふるさと会の活動資金にしてもらいたい。 / 平成27年8月、松井治二氏死去に伴い、本人の写真をもとに木彫りの像を作成、贈呈。本人は高齢のため訪問は難しいが、何らかの支援をしたいと考えている。松井治二氏の言葉に感銘を受けた。残していきたい、伝えていきたい、多くの人に来てほしいという思いを少しでも手助けするために、フクロウを送る。	年2回程度 現在は高齢のため、ほとんど訪問していない
15	埼玉県在住 80代女性	ご主人とともに	人が皆温かく迎えてくれる。歓迎してくれるのがうれしい。	高齢のため、現在は訪問しない
16	埼玉県在住 40代女性	平成27年8月車の運転を友人に依頼して、親子で訪問。	観光もさることながら、そこでの地域住民との出会い、交流を楽しみたい。人とひととの距離感がちょうどいい近すぎることもなく、親戚のようなそうではないような不思議な魅力がある。山古志を通じての出会いは今回のヒアリング調査員に対しても同様。 長岡花火、闘牛会も目的の1つ。 山古志に関心を持つ友人と共に再訪したい。 / 災害があり大変だった、被害がこんなだった」という記憶よりも、その後。その地域でどうしていくのか、どう生きていくのか、続けていけるのかを考えるきっかけだったと思う。震災の話だけでなく、その後のふるさと会の活動や(闘牛や錦鯉、アルパカ等)人を引き付ける魅力がある。 気持ちのキャッチボールができる。こちらの気持ちを受け止めてくれて、それが返ってくる、やまびこのよう。	昨年8月、8月の2回
17	埼玉県在住 50代男性	棚田、錦鯉、闘牛で有名な山古志。中越地震の被災地ということもあり、一度来てみたかった。	2度目の訪問で、民宿主人から聞いた震災の話、復興の話に心打たれて、「また来なくちゃ」。「恩返ししなくちゃ」という言葉に「はたかかっている」感じ。地域の人が、よそから来た人を大切にしてくれる。地域の人と顔見知りになったから。 写真が取れなくても、楽しみはある。闘牛もその1つ。楽しみは1つじゃない。写真愛好家は天候や季節に左右されながら何度も同じ場所に通う。2015.6月闘牛の牛を所有した(牛持ちになった)から。 / 自宅から3時間弱で95年夏、阪神淡路被災地へ、消防団仲間とともに研修で訪問。 中越地震の際も掛け合ったが時期経省だと却下され。仕事から、東北の被災地へも訪問している。 道がわからないと地域の人に聞くといろいろと話をしてくれる。方言がわからず最初は怖かった。 石巻にも行くが…広すぎて回り切れない。人が多い。町中だと特にしんみりもできない。つかみどころがない(開けすぎている)⇨狭い範囲だと回り切れる。人口も少ないので親しくなれる。顔と名前を覚えられる。	ほぼ月1回ペース。多い時には月2回 年13回の闘牛会開催時には来訪
18	東京都在住 70代女性 新幹線を利用	新潟県魚沼市(旧広上村出身)一昨年、木籠を取り上げたテレビ番組を見て関心を持ち、会員に。	今回が初めての参加。年中行事がいろいろあることを知ったので、機会があればまた必ず参加したい。ふるさとを思い出す。	年1~2回
19	東京都在住 50代女性 新幹線を利用	母同様、テレビで見て、自然の多い美しいところだと思い、会員に。	今回が初めての参加。 手作りのクルミ入りクッキーを持参したところ、木籠住民に「ここにはクルミもたくさんあるよ」と誘われ、秋に再訪することを約束。	年1~2回

に)」といった言葉をかけてもらえるのがうれしいとも言っている。

さらにその娘 (No.16) は、牛の角突きや錦鯉、アルパカといった観光資源も魅力のひとつとして挙げているが「人とひととの距離感が丁度いい」「親戚のようで少し違う関係」「気持ちのキャッチボールができる。こちらの気持ちを受け止め、それを返してくれる」といったように、集落の人との関係にも魅力を感じるとしている。また、山古志地域に関心を持った友人を連れて訪問し、さらにその友人が再訪するなど他者の山古志訪問のきっかけともなっている。

3.5 再訪の要因に関する考察

本節では第3章1節から第3章4節の分析結果をもとに考察を行う。

今回のインタビュー調査より、中越地域、山古志、木籠集落へ初めて訪問したきっかけは「震災の被災地を自らの目で確かめたい」(第3章3節、第3章4節より)「被災地支援をしたい」(第3章2節、第3章4節より)といった「被災地」を訪問することを目的としたことがわかった。さらに、被災地を訪問することが目的ではなく家族や知人に連れられて訪問したという理由(表4、表5より)も挙げられた。しかし、「震災」を契機とした能動的な訪問や、「震災」に関係がない受動的な訪問のいずれの場合も再訪の要因は共通していた。再訪の要因として大きくは以下の3点にまとめられる。

- 1) 集落住民や山古志地域に感心を持つ仲間と共に過ごすため。「人との交流」
- 2) 自らの趣味を生かし楽しむため。「自分の居場所づくり」
- 3) そこで担う自らの役割を果たすため。「役割・生きがい」

このうち1)、2)は安達らの明らかにしたりピーター形成要因のそれぞれ「人的つながり」「空間的なつながり」に対応した知見である。1)の「人との交流」は安達らのいう「人的つながり」に当たり、訪問先での住民との交流が再訪の要因とされている。2)の「自分の居場所づくり」は安達

らの言う「空間的なつながり」と同じで、趣味を楽しむためある程度の時間をそこで過ごすことが再訪の要因となると先行研究でも明らかになっている。その他の「食事の重要性」「いくつかの満足よりも、1つの感動」「最初の印象の重要性」については今回の調査では再訪の要因としての有無を確認できなかったため、今後その存在について検証していく。一方、3)は、旅行者が訪問先で主体的に役割を担い自らの生きがいにすることは、一般的な観光地の研究においては見られず、災害伝承施設のリピーター獲得において重要な知見であることを示唆している。

1)、2)は先行研究と共通する知見であるとともに、他の災害伝承施設でも適用できる知見として挙げられる。1)は、他の施設においてもボランティア同士の交流や、語り部の講話・現場見学の中で地元住民との交流が生まれることが容易に想像できる。2)は、災害伝承施設と周辺の観光地を組み合わせることで趣味を楽しむことができると考えられる。3)については、木籠メモリアルパークにおいてはリピーター自らが来訪者をもてなし、再訪につなげる役割を果たしていること(第3章2節より)が他の被災地では見られない特徴であり、現段階では他の災害伝承施設への適用が難しい点だと考えられる。

ただし、今回のインタビュー調査はふるさと协会会员に限定されたものであり、提示される再訪の要因についても会員のものに限定されるため、非会員の再訪の要因を探る調査の継続が必要である。さらに、他の災害伝承施設の再訪要因の事例も調査することで普遍性、妥当性を高めることが可能になると考える。

4. おわりに

本研究では、中越メモリアル回廊のうち、オープンして以降徐々に来館者が増加し、リピーターも多い木籠メモリアルパークを対象にして調査した。一過性の施設ではなく、持続可能な運営を実現させるためにはリピーターの確保が必要である。そこで、再訪の要因や再訪に至る動機付け、リピーターを獲得するメカニズムを探索的に明ら

かにすることを試みた。その結果は次のようにまとめられる。

- 1) 地域住民以外の会員インタビューから、来訪者の多くは震災メモリアル施設に対して、震災当時の被害の様子や災害の事実から学ぶことを目的としているだけでなく、地域住民との交流を求めていることが分かった。
- 2) 震災伝承施設を訪問した際には、施設側からの一方的な伝承行為を受けるのではなく、催事やイベントへの参加、地域活動へ主体的に参画し役割を担うことで、震災伝承施設見学だけでは得られない魅力を感じ再訪へとつながっていることが明らかとなった。
- 3) リピーター自身が震災伝承施設と施設が立地する集落および集落住民の活動をサポートするため、新たな来訪者やリピーター獲得に寄与する立場に変化していた。

このことから、継続的に来訪者を獲得する災害伝承施設の要件は、以下のようにまとめられる。カッコの中は表2～5のインタビュー調査対象者のIDナンバーに対応している。

- 1) 災害伝承施設に地域住民が介在し来訪者との交流が生まれること。(No. 1～3, 14～17)
- 2) 施設や地域住民が一方的に災害伝承活動および被災地復興や地域振興に関する取り組みを行うのではなく、来訪者も役割をもち主体的に関われること。(No. 5～9)
- 3) 支援者やリピーターの口コミによって新たな来訪者・リピーターの獲得が行われること (No.6, 11, 13)

以上の要件を取り入れることにより、木籠メモリアルパークを含む中越メモリアル回廊の4施設3メモリアルパークは震災伝承施設であると同時に、被災地復興、地域振興に寄与する施設、多くの人に利用される交流拠点になると考えられる。今後は、以上の知見について、質問紙調査などの量的調査によって結果の妥当性を検証していきたい。

謝辞

本研究は、日本学術振興会課題設定による先導的人文学・社会科学的研究推進事業・実社会対応ブ

ログラム「効果的・持続的な災害伝承を目的にした拠点構築手法のモデル化と実践的研究」(研究代表者:佐藤翔輔)の助成によるものである。

参考文献

- 1) 震災復興ビジョン策定懇話会(座長河田恵昭):新潟県中越大震災復興ビジョン, 震災復興ビジョン策定懇話会, p.22, 2005
- 2) 新潟県:新潟県中越大震災復興計画, 新潟県, pp.75-77, 2005
- 3) 清野 隆・明峯哲夫・青柳 聡・川澄厚志・杉原由紀子:山古志における農的営みを支える農産物直売所の現状と課題, 東洋大学 福祉社会開発研究 4号(2011年3月), pp.3-22
- 4) 其田智洋・高橋和雄・末吉龍也・中村 聖:島原地域の火山災害学習施設を利用した火山観光の推進と観光客の動態に関する調査, 自然災害科学, Vol. 25, No. 2, pp. 197-220, 2006.
- 5) 雲仙岳災害記念館:雲仙岳災害記念館のあり方検討に関するFS調査業務委託仕様書, <http://www.udmh.or.jp/proposal/pro201406-2.pdf>
- 6) 佐藤翔輔:「災害を伝える」活動の最新動向-「災害かたりつぎ研究塾」の合宿活動をもとにして-, 口承文芸研究, No. 38, pp.42-51, 2015.3.
- 7) 佐藤翔輔:震災伝承のあの日まで・あの日から・これから, 宮城県平成29年度津波防災シンポジウム, 2017.5.
- 8) 筑波匡介:新潟県中越大震災における震災遺構-中越メモリアル回廊 山古志木籠について-, 災害・復興と資料第7号, 新潟大学災害・復興科学研究所被災者支援研究グループ, pp.39-44, 2016
- 9) 岡村 薫・福重元嗣:リピーター観光客育成に向けた観光プロモーション策, 財団法人関西社会経済研究所, p.3, p.11, 2007
- 10) 安達寛朗・塩谷英生:リピーターの形成過程に関する研究, 観光文化振興基金による自主研究論文集, 財団法人日本交通公社, pp.15-20, 2008
- 11) 齋藤 静:高齢期における生きがいと適応に関する研究-ネットワークの観点から-, 現代社会文化研究 No.41 2008年3月, pp.63-75

(投稿受理:平成29年4月7日
訂正稿受理:平成29年7月13日)

要 旨

中越メモリアル回廊のオープンから5年が経過し、各拠点施設にはそれぞれ異なる特徴を持つ来館者・リピーターが来訪する傾向が見えてきた。より多くの来館者に利用され、一過性の施設ではない永く愛される施設となるには何が必要かを探るため、木籠メモリアルパークを例に調査した。

- 1) 災害伝承施設に地域住民が介在し、来訪者との交流が生まれること
- 2) 施設や地域住民が一方的に災害伝承活動および被災地復興や地域振興に関する取り組みを行うのではなく、来訪者も役割をもち主体的に関われること
- 3) 支援者やリピーターの口コミによって新たな来訪者・リピーターの獲得が行われること

本研究では、木籠メモリアルパークを含めた中越メモリアル回廊の4施設3メモリアルパークが災害メモリアル施設であると同時に、多くの人に利用される交流拠点となるために必要な要件を上記の通り考察しまとめた。